

【レポート】

小学生による「にげ地図からの防災まち探検」：災害時になにができるかまちあるき！

令和6年10月28日(月)の放課後、福井市清明小学校の児童を対象にした「防災まち探検」を開催しました。

集まってくれたメンバーは、この春に、公民館の防災教育事業「逃げ地図ワークショップ」に参加して下さった小学生とその友達です。また、防災に興味を持っている保護者も数人参加してくれました。

この取組みは、災害時に必要な知識を自分たちの身近な場所で考える防災教育であると同時に、

- ・自分たちの目でまちをみなおす
- ・自分たちでできることを考え、広めていく

といった自主性を育むねらいもあります。

これまで、7月3日と9月4日の2回、子どもたちを中心に企画会議を実施しました。そして、まち歩きをしようと決定した日が10月28日でした。

今回は、かつて福井市役所で危機管理対策監をされた経験もある防災士の飛田幸平氏を講師としてお願いしました。

彼は、現地の事前調査のうえ、子どもたちと一緒に学校周辺を歩きながら様々な観点から防災対策について教えてくださいました。子どもだけでなく、大人にも多くの発見や驚きがあり、地域の防災意識を高める素晴らしい機会となりました。

今回の災害想定は主に水害でしたが、講師は地震の対処もところどころ交えて話してください、複合的に取り組みました。

日 時 令和6年10月28日(月)14:30から16:30まで

場 所 福井市清明小学校(福井市下荒井町13-240)周辺

参加者 清明小学校児童及びその保護者 10名

講 師 防災士 飛田幸平氏(元福井市危機管理対策監)



出発地点から歩きながら

探検の出発地点は近くの清明公民館です。

まず、歩道に出てすぐに「段差」に注意を呼びかけました。専門家からは「水害時には段差が見えなくなり、意外な危険になる」との説明があり、普段から足元への注意が大切だと実感しました。特に私たちの地域はハザードマップによると最大で3mもの浸水が想定されています。実際に3mの

高さを棒で示してもらおうと、一階部分が完全に浸水する高さであることが子どもたちにも伝わり、驚きの声が上がりました。

浸水時の避難方法を考える

次に、実際に水がどのくらいの深さまでなら歩いて避難できるのかという話題に。くるぶし程度までなら何とか歩いて移動できるが、それ以上の深さでは危険が増すため、垂直避難（建物の上階への避難）を考えるようアドバイスがありました。また、浸水時に履きたくなる「長靴」は水が中に入って脱げやすくなるため、実はNGとのこと。代わりに、ズックやスニーカーなどを履くほうが安全だそうです。

田んぼや歩道、街路樹への注意

歩道の横に田んぼが広がる地域ならではのリスクも紹介されました。田んぼが浸水すると境目が見えなくなり、思わぬ場所で足を踏み外す危険があるため、歩道の真ん中を歩くことが推奨されました。また、街路樹についても増水時や強風時に倒れる危険があり、いざというときは近づかない方が良いと説明されました。

自動販売機と橋のチェックポイント

街中でよく目にする自動販売機にも注意が必要です。固定されていない自動販売機は倒れたり、増水時には浮かんだりすることもあるため、安全を確保するために近寄らないことが重要だそうです。さらに、川にかかる橋が見えてきたところで、橋げたの有無を確認。橋げたに流木が引っかかると水



をせき止めてしまい、溢れる原因となることもあるそうです。

ゴミステーションにもある「災害時のリスク」

探検ルートにはゴミステーションもありました。通常、ゴミステーションのドア下部分が鉄板で覆われていると水が抜けず、浮いてしまうことがあるそうですが、今回確認したゴミステーションは全体が網状だったため、その心配はあまりなさそうでした。こんな身近な場所にも防災の工夫があると知り、子どもたちも関心を示していました。しかし、地震の際は倒れてくることを考えないといけません。

橋の観察と水の行き場

いつも通学時などで通る橋には橋げたはあるか確認しました。見学した橋に橋げたはありませんでしたが、もっと大きな川にかかっている橋には橋げたがあります。これは橋の強度を上げるものですが、水害で川が増水した際には、流木などが引っ掛かり、水の流れをせき止めてしまうので増水や溢水の危険が増します。これから、違う場所に行って橋を見かけたらどうなっているか観察してみるもの大事です。

また、昔は田んぼや畑が貯水ダムの役目を果たしていましたが、どんどん埋め立てられてしまい、そのために水の行き場がなくなって、川にすべて流れこんだり、そのまま道路や街にあふれたりすることも起きている事実を考えなければなりません。

公園の一時避難所と水場

学校に隣接する公園には、自治会名と「一時避難所」と記載された看板がありました。災害発生時にはまずここに地域の人々が集まり、お互いの安否を確認してから必要ならば指定避難所に向かう仕組みになっています。公園には水場もあり、飲料水が必要な場合はここで確保できることも確認しました。



ブロック塀…倒壊の危険がいっぱい

学校に近づくとブロック塀が現れました。地震は突然襲ってきます。どうしたら自分の身を守るかを第一に考え、実際頭を抱えた低い姿勢(シェイクアウト)をとってみました。講師からは、くれぐれもブロック塀には近づかないようにと念押しされました。他県で痛ましい事故が実際起きているのです。

学校周辺の用水路と安全な避難経路の確認

学校の前には用水路が流れています。講師からは、「ここはこのあたりで一番危険な場所なので、絶対に近づかないように」との注意を受けました。子どもたちも大人も真剣に耳を傾けていました。増水する危険性のほか、うっかりはまってしまうと自力では這い上がれないからです。

また、私たちの地区の小学校は防犯のためでしょう、ぐるっと高いネットで囲まれています。このあたりの指定避難所としてまず開設されるのはこの清明小学校です。

しかし、災害時には出入り口が少ないため、近くに住んでいたとしても避難が思いのほか難しくなることもわかりました。これも、防災を意識して初めて気づくことです。

まちをいろいろ探検して、いよいよ小学校の校庭わきに進んできました。小学校は、災害が起きた時に最初に開設される指定避難所になっています。

校庭の防災設備と拡声器

校庭のわきには防災用の拡声器が設置されています。私たちが住む市には200余りの拡声器が設置されているそうです。小学校区は50前後ですので、その4倍以上ということになります。今まで全然気に留めていませんでしたが、見上げてみると遠くまで聞こえそうな高い柱に取り付けられています。ちなみに福井市内には、500mに1基設置されているそうです。

ここからは定時のサイレンや災害情報が流れる仕組みですが、風向きなどで聞こえにくいこともあるため、非常



用の情報伝達のための電話番号「25-2914(にっこりふくいし)」も教えていただき実際にその音声も聞いてみました。録音した音声が出てきますが、24時間利用できるのだそうです。

電話番号は、語呂合わせでおぼえやすいようになっていました。いざという時に、確実に情報が届くような工夫がなされていることに安心しました。家に帰ったら早速おうちの人に教えて番号登録してもらおうとみんなメモをしていました。

住居表示の看板にも工夫が



歩く道すがら、電柱に、ここが何という町名で、避難所はどこで、現在地はどこかわかる略図が書いた長方形のプレート、看板が取り付けられています。

これは、2018年開催の福井国体に向けて整備されたのだそうです。デザインは黒地に白い文字。赤いラインのアクセントも施されていました。当時、地元の大学生が手掛けたユニバーサルデザインになっているのだそうです。これを見れば自分の地区外で被災しても、どこへ逃げればよいのか一目でわかるようになっていますし、もちろん旅行に来ている人にもわかるようになっています。

プールの水が「消火用貯水」とトイレの水に

校庭のわきにあるプールは、災害時の消火活動に備えて夏でなくても貯水されています。もしプールの水が空になるときは小学校の校長が消防機関へ連絡することになっているのだそうです。校長は、実は責任の重い仕事を任されているんですね。

また、学校の敷地の出入口は普段ほとんど施錠されていますが、プールの横の通用門だけはいつでも使えるように開かれており、避難時にも活用できるようになっています。プールの手前にはマンホールトイレ用の蓋もあり、災害時には、この上に便座を設置して、さらに専用テントで囲い、トイレとして使います。流す水はプールから引いてきます。もちろん車いす対応の広めのトイレもできるようになっていました。トイレのマンホールは地下で下水と繋がっていますが、破損などで下水に流せないことには止水して使用することもできるともことでした。

いざというとき、ちゃんと用を足せるかな……。排泄はだれにとっても切実な問題です。

我慢すると体を壊してしまいますから。「実際に組み立ててみたかった」という声も聞かれました。地元の自主防災会連絡協議会の方が管理されているので、ぜひ今度、みんなでもやりたい、といわれました。

校庭の防災備蓄倉庫の中身を見学



防災備蓄倉庫には、自家発電機、毛布、リヤカー、段ボールトイレ、避難所用段ボール間仕切り、食料、それに水などが備えられていますが、それでも約 100 名分程度の物資しか収納されていません。多くの地区民が避難することを想定すると全員分には全然足りませんので、各自宅での備蓄が重要であることも再確認されました。ちなみに

避難所開設時の一人当たりのスペースは畳一畳分くらいだそうです。

非常用貯水装置と携帯ポリタンク

備蓄倉庫の隣には非常用貯水装置があり、地下の水を手押しポンプで汲み上げる仕組みです。この地区では、5000 人分が 3 日分用意されています。

一日に人は3リットル必要とされているので、とてもたくさんの量の水です。それでも全地区民は 5000 人以上ですので、もし全員が被災した場合には不足します。そもそも全員が被災する想定にはしていないそうです。水は大変重要です。それぞれの家庭での備蓄がいかに必要か認識を深める機会となりました。



非常食の試食の大切さとトイレのこと

こうしてまちの様々な危険個所と備えを見学した探検の最後に、備蓄用の水やビスケット、レトルト食品を講師からいただきました。

講師から皆さんへのお願いとして、これをこのまま保存しておくのではなく、おうちに帰ったら一度食べてみてほしい、とのこと。人は食べたことのある物は受け入れやすいのだとか。非常時に突然、乾パンやレトルト食品、アルファ米などを食べるのではなく、普段から食べてみて、味付けの確認や、自分の体

にどんな変化が起こるかを知っておくのは大切なことです。

ちょうど、以前の防災教育事業で作っておいた段ボールトイレもみてもらい、実際に座ってもらいました。子どもも大人も最初はおっかなびっくりでしたが「意外と丈夫！」と驚きつつも、やはり、紙製ですから、半永久的に使えるわけではなく水にも弱いという説明を聞き、自宅でもいくつかの段ボールなどの備えをしておくことが大切だと感じてくれたようです。万が一、3m浸水したら、一階にしかトイレのないお宅は大変困ることになりますから。

今回のフィールドワークでの「逃げ地図」の活かし方

今回は、実際のまち歩きには逃げ地図をもってあるくことはしませんでした。引率の大人が少ないことや、子どもの注意を最大限に実際のまちの様子や講師の話に向けるためです。

ただ、2回の企画会議では、2月の逃げ地図6種類を全部掲示し、地区の様々な危険個所を確認したり、自分たちが普段よくいく公園を確認したりしました。

その結果、縮尺が広域のものは、子ども目線ではイメージしづらいことがわかりました。これを受けて、公民館で1500分の1程度の地図を用意し、逃げ地図の考え方に基づいた色分けのものを簡易的に参考資料として用意しました。これをみると、小学校が指定避難所ではあるが、東側と西側では色がちがうことや、子どもたちのよく集まる公園は、いざというときどれくらい時間がかかるかなどを知ることができたと思っています。

参加者の感想(抜粋)

- ・ 3mが思っていたよりも高くて驚いた
- ・ にっこりふくいし(25-2914)を覚えた(複数回答あり)
- ・ 自分が普段使っている通学路に危険なところがあったので、意外だなと思いました
- ・ ビスケットがビスコになったのは、いっぱい食べていてなじみがあるからあんしんできるとわかった(福井市の備蓄食糧がビスケットからビスコに変更になったとの説明を受け)
- ・ 普段何も思わず通っていたけど、危険がいっぱいでびっくりしました
- ・ 自分が住んでいるところは危ないところがたくさんあることがわかりました
- ・ 足首くらいまで水が来たら学校に行かず二階に大事なものを持って2階に避難

することが大事

- ・ 段ボールでトイレを創れるから作ろうと思いました。
- ・ ひじょうしょくは1回以上たべたらいいとわかりました。
- ・ 災害トイレの場所やしくみが知れてよかった。実際に発電機やトイレなども使ってみる。災害食も食べてみる(ことが大事)。災害時にそれがわかっていると安心につながる。大切なことだと思いました。
- ・ 3mが1階すべてのところがそこまで福井は(雨が)降るんだと分かりました
- ・ 自分が普段使っている通学路に危険なところがあったので、意外だと思いました
- ・ 足首まで水がきたらくつでいくことがここにのこりました
- ・ 25-2914 に架けると 24 時間ごとに変わる、防災無線のことがきこえること
- ・ 水はとても大事。非常食は食べて味を確かめる。「にっこり福井市」をおぼえておけばいいということです
- ・ 3メートルは人よりも高いから浸水になったら2階に上がる。
- ・ おうちの1かいはおみずにつかることがわかった

まとめ

今回の「防災まち探検」は、小学生にとって、身近な場所で防災意識を高める貴重な学習機会となりました。普段は何気なく見たり、あるいは見落としたりがちなまちの風景が、災害時には大きな意味を持つことを再発見できました。

また、改めて自分の命は自分で守ることを意識し、避難所に行くことだけでなく、自宅の備えを高い階へ逃げる「垂直避難」も考える必要があるとわかりました。もし、自分の家が平屋建てだったら、ご近所さんにあらかじめ頼んでおいて避難させていただくようなことも真剣に考えないといけないときづかされました。

今後も、このような地域の活動を通じて、防災意識を広めていきたいと思います。同時に、子どもたちに気づきの機会をいろいろ開催できたらいいと思います。